『正論』平成二十五年十一月号より転載

総力特集

『はだしのゲン』許すまじ！

問題シーンを一挙公開 これでも子供たちに読ませますか？

正論編集部

創刊40年特別号の記念すべき最初の論文を、かくも醜悪なマンガの描写で汚さなければならないのは、これが第二の教科書運動になると確信してのことである。いや、自虐的といわれた当時の中学歴史教科書でさえ、このマンガに比べたら良書に思えるだろう。それが今も全国の公立小・中学校の図書室に置かれ、日教組の教師らによって子供たちに読むことを勧められている。

「はだしのゲン」のことだ。

今年8月26日、このマンガを学校で閲覧することを制限していた松江市教育委員会は、朝日新聞などのメディアや左翼団体の猛バッシングを受け、閲覧制限を撤回した。しかし私たちは、この「撤回」こそ撤回すべきだと主張する。さらに私たちは、松江

市だけでなく全国の教育委員会がこのマンガを学校の図書室から放逐すべきだと主張したい。

なぜなら「はだしのゲン」は、明らかに学習指導要領に反しているからだ。

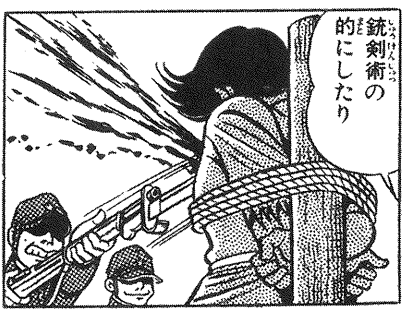
以下、このマンガの内容がどれほど学校の図書室にふさわしくないか、学習指導要領と対比させて検証してみたい。

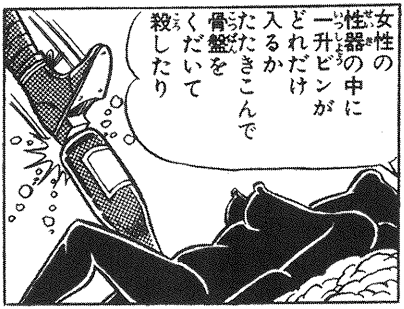
一、児童の発達の段階を考慮し社会的事象を公正に判断できるようにする

＝小学校指導要領・社会

マンガ「はだしのゲン」は、反戦思想の父をもつがゆえに地域や学校から阻害され、いじめられていたゲンが、原爆によって父と姉弟の命を奪われながらも、生き残った母と幼い妹を助け、原爆孤児の仲間たちとも支え合って、被爆地の広島を懸命に生き抜くというストーリーだ。

このストーリー自体に、何ら問題はない。子供たちに悲惨な戦争の実態を伝え、平和の尊さを教えるのは、大切なことである。だがもちろん、その内容は「児童の発達の段階を考慮」し、「社会的事象を公正に判断できる」ような史実に基づくことが大前提だ。





ところが、ゲンが伝える「悲惨な戦争」は、中国共産党のプロパガンダそのままである。たとえば日本軍将兵の残忍性を示した前頁の4コマだ。

日本軍将兵が「妊婦の腹を切りさいて中の赤ん坊をひっぱり出したり」、「女性の性器の中に一升ビンがどれだけ入るかたたきこんで骨盤をくだいて殺したり」した史実はない。むしろ通州事件にみられるよう、非戦闘員である婦女子を残虐に殺害したのは中国兵のほうである。

ゲンはこのほか、「日本軍は中国、朝鮮、アジアの各国で約三千万人以上の人を残酷に殺してきとるんじゃ」とか、「わしゃ日本が三光作戦という、殺しつくし、奪いつくし、焼きつくすで、ありとあらゆる残酷なことを同じアジア人にやっていた事実を知ったときはヘドが出たわい」などと、日本軍将兵を繰り返し罵倒するが、いずれも史実とかけ離れている。

そもそも、このような過激なマンガを、小学1年生でも容易に手に取れる学校の図書室に置くべきではない。イデオロギーとは無関係のシーンでも、このマンガには残虐な描写が多すぎるのだ。焼けただれた皮膚、無数のウジがわいた傷口、腐ってずる剥けになった肉片…。子供が死んだことが受け入れら

れない母親が、ハエのたかった遺体の口に無理やり桃を押し込むシーンなどは、大人には理解できても、幼い子供が読めばショックでトラウマになる恐れもある。

二、天皇についての理解と敬愛の念を深めるようにする

＝小学校指導要領・社会

奇しくも「はだしのゲン」は、正論が創刊した昭和48年に『週刊少年ジャンプ』で連載がスタートした。しかし読者である子供たちの評判は芳しくなく、翌49年に連載は打ち切られる。本来ならそのまま忘れ去られていくはずだったが、朝日新聞の記者や大江健三郎氏が盛んに持ち上げた結果、51年から共産党系の論壇誌『文化評論』で、55年からは日教組の機関紙『教育評論』で連載が続けられることになった。

同時に、ジャンプ連載期には抑制されていたイデオロギー性が、作品の中に色濃く出てくるようになったのである。

中でも執拗に繰り返されるのが、天皇批判だ。たとえばゲンの弟分の原爆孤児「隆太」がヤクザら3人を殺害して警察に自首しようとするシーン。ゲンと仲間の少女が「（一緒に）東京へ逃げよう。東京は人間があふれとるけえ、中にまぎれこめば見つからんよ」と逃走の手助けをする。それだけでもう、中学校指導要領にある「法やきまりの意義を理解し、遵守する」の規定に真っ向から反しているのだが、逃走を正当化する理由が実に酷い。

少女「戦争の犠牲にされた隆太が刑務所に入るのは不公平じゃ。殺人罪で永久に刑務所に入らんといけん奴は、この日本にはいっぱい、いっぱいおるよ」

隆太「だ、だれじゃ」

少女「まずは最高の殺人者、天皇じゃ。あいつの戦争命令でどれだけ多くの日本人、アジア諸国の人間が殺されたか」

ゲン「ほうじゃ。戦争のために隆太は殺人者にされたんじゃ。戦争のもとをつくった奴らがのうのうといばっているのは本当に不公平じゃ。日本人の手で天皇はじめ戦争指導者を裁く裁判をやらんといけんわい」

ちなみに隆太が殺人を犯すのは終戦から七～八年も経ってからで、戦争とは全く関係がない。にもかかわらずゲンたちは、自らに都合の悪いことは何でも戦争のせい、天皇のせいにする。このシーンの前後にも、呪詛のような天皇批判が延々と続くが、これを読まされた子供たちは、「天皇についての理解と敬愛の念」を深められるだろうか。

三、国家「君が代」は、いずれの学年においても歌えるよう指導する

＝小学校指導要領・音楽

ゲンはまた、君が代の国歌斉唱を激しく拒絶する。その理由はまたしても天皇だ。中学校の卒業式で君が代の伴奏がはじまると、ゲンが「やめろう、やめろう」と怒鳴りながら教師たちに詰め寄り、こう捲し立てる。

ゲン「なんで君が代を歌うんじゃ。わしゃ歌わんぞ。君が代の君は天皇のことじゃ。わしゃ天皇はき

らいじゃっ。なんできらいな天皇をほめたたえる歌を歌わんといけんのじゃ。天皇は戦争犯罪者じゃ」

来賓の県会議員「き、きさま、なんちゅう畏れ多いことを言うんじゃ」

ゲン「やかましい。天皇が無謀な太平洋戦争をやれとゴーのサインを出したおかげで日本列島は焼け野原にされ、この広島も長崎も原爆までくらって、わしの家族をふくめ日本人三百万人以上がもがき苦しんで殺されたじゃないか」「（アジアの人々ら）数千万人の人間の命を平気でとることを許した天皇をわしゃ許わんわい。いまだに戦争責任をとらずにふんぞりかえっとる天皇をわしゃ許さんわいっ。君が代なんか、だれが歌うもんか、クソクラエじゃ。君が代なんかっ、国歌じゃないわいっ」

そしてゲンは「みんな、わしらの卒業式じゃ、わしらの歌を歌おうじゃないか」と生徒たちを扇動し、みんなで「青い山脈」を合唱するというオチになっている。

繰り返しになるが、こうした君が代反対や天皇批判が激しさを増すのは週刊少年ジャンプでの連載が終わってからで、とくに日教組の機関紙に連載されたマンガの終盤に際立って多い。そこには、日教組の反国家的イデオロギーがより先鋭化されて表出しているといっても過言ではないだろう。

四、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする

＝小学校指導要領・社会

学習指導要領から逸脱した「はだしのゲン」の描

1 このチラシ配布にご協力ください。
2 活動支援カンパも受け付けています。
一口 千円（チラシ100枚分）

平和と安全を求める被爆者たちの会
〒731-0102
広島市安佐南区川内4-11-18
TEL082-831-6205
mail info@realpas.com
www.realpas.com

写は、数えればきりがない。中学生のうちから酒を飲んだり暴力を振るったりするゲンやその仲間たちは「約束や社会のきまりを守り、公徳心をもつ」（小学校指導要領・道徳）に反するし、保守的な校

長や教頭に反抗するゲンの態度は「先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる」（同）と相容れない。

何より問題なのは、教育基本法にも盛り込まれた「我が国と郷土を愛する」心の育成を阻害していることだ。反戦思想を持つゲン一家と仲間の原爆孤児ら一部を除き、登場する日本人は子供から大人まで大多数が強欲で、卑劣で、残忍で、弱い者イジメばかりしているように描かれている。これでは、「日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努める」（中学校指導要領・道徳）ような健全な愛国心を育成できないだろう。

一方でゲンは、朝鮮人に対してはどこまでも寛容だ。たとえば満員の列車に在日朝鮮人が乗り込み、座席に座っていた日本人を棍棒で叩いて追い出すシーンがある。これにゲンの弟分の隆太が「くそ、朝鮮人がいばりやがって」と怒りをあらわにすると、ゲンが静かに言う。

ゲン「日本は戦争で朝鮮人をバカにして、こきつかって多くの人を殺してきたんじゃ。朝鮮人がいばる気持ちはわかるわい。広島や長崎のピカでもむりやりつれてこられ、いっぱい死んどるんじゃ。朝鮮

人をバカにするな」

近年、領土問題や歴史問題で中国や韓国の横暴がエスカレートしているが、それでも明確に抗議の意思を示すことが出来ない雰囲気が、こうしてつくられていくのである。

五、学校図書館を計画的に利用してその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する

＝小学校指導要領・総則

通常、学校の図書室にマンガが持ち込まれることはない。しかし「はだしのゲン」だけは別で、昭和50年代後半から日教組の教師たちによって全国の学校に置かれるようになった。今回の問題の発端となった松江市では、市立小学校35校、中学校17校のうち約8割が単行本や文庫版などを所有していたが、全国でも似たような状況だろう。

ほかにも多くのマンガが置かれているわけではない。「はだしのゲン」だけが、学校で読まれることを許されているのだ。そして子供というのは、どんな駄作であれマンガなら読むのである。

想像してみてほしい。ゲンを読んで育った子供たちのことを。彼らに、「もしも外国の軍隊が日本に攻めてきたらどうするか？」と聞いてみたら、躊躇なく「逃げる」と答えるだろう。領土が奪われても国家が蹂躙されても構わない、戦争するくらいなら土下座してでも相手国の言いなりになるほうがましだ――と。

ゲンはそうやって子供たちを洗脳する。それをしも平和教育と言うのだろうか。

言うまでもなく、私たちは「はだしのゲン」の焚書を求めているのではない。ゲンの生き様にシンパシーを感じる人もいるだろう。親が自らの責任において我が子に読ませるのも構わない。ただ、公立小・中学校の図書室に置かれるほとんど唯一のマンガとして、低学年生でも何げなく手にとれるような状態のまま放置してはならないと言いたいのだ。

近年、中学歴史教科書を改善する運動が全国に広まり、大きな社会運動となったのは、実際に教科書を読んだ知識人から一般の保護者に至るまで、そのあまりの自虐ぶりに驚き呆れ、これを子供たちに読ませてはならないと感じたからだった。

いま、同じ保護者がこのマンガを読んだなら、こう言うに違いない。

「はだしのゲン、許すまじ」